

"学ぶ"に寄り添う
コミュニケーションマガジン

2021社内報アワード
ブロンズ賞
受賞

NEWS LETTER
SEIGAKUIN NEWSLETTER

& Seig

No.
282
Mar.2022

特集

プロジェクトで、描くミライ。

巻頭座談会

聖学院大学のフチ・アルシュと
聖学院中高のみつばちプロジェクト、
国連WFP協会による
トークセッション



各校・各園卒業生インタビュー
歩む人たち
聖学院大学卒業生 中島 結女さん

関係団体の皆さんにインタビュー
支える人たち
株式会社レバスト 高山 映里さん

読者の声

プロジェクトで、描くミライ。

特集

CONTENTS

01_ 特集 プロジェクトで、描くミライ。

聖学院大学のプチ・アルシュと
聖学院中高のみつばちプロジェクト、
国連WFP協会によるトークセッション

03_ & Talk

聖学院各校のプロジェクト活動

07_ focus

07_ ボランティア団体「いろいろどり」
[聖学院大学]

08_ 聖学院 防災エコプロジェクト
[聖学院中学校・高等学校]

09_ お手伝いしたい隊
リーダーシップ研修
[女子聖学院中学校・高等学校]

10_ チャイルドサポーター制度
[聖学院小学校]

11_ 各校・各園卒業生インタビュー
歩む人たち [中島結女さん]

関係団体の皆さんにインタビュー

12_ **支える人たち** [高山映里さん]

13_ Seig NEWS

16_ 読者の声／編集後記

17_ 2023年、聖学院は創立120周年を迎えます

120年の轍を歩む

19_ **聖学院歴史探訪** ーディサイプルス教会 上ー
[EPISODE #16]

聖学院ニュースレターアンケート

QRコードからあなたの声をきかせてください。
アンケートに回答いただいた方の中から抽選で
10名様に「聖学院オリジナルキーホルダー」を
プレゼント!いただいたご意見は、編集の上本
誌にてご紹介させていただくことがあります。



- 有効回答期間
2022年3月17日～2022年5月31日
- 当選発表
当選者の発表は、賞品の発送をもって
代えさせていただきます。



本アンケートに関するお問い合わせ
聖学院広報センター Tel 03-3917-8530

聖学院中学校・高等学校（以下聖学院中高）と女子聖学院中学校・高等学校（以下女子聖学院中高）が協働で取り組んだバラスポーツ応援プロジェクト、聖学院大学の東日本復興支援プロジェクトなど、聖学院は学院全体を通じて生徒・学生主体のプロジェクトが多数存在します。聖学院中高では2021年度より世界に貢献できるグローバルイノベーターを育成するグローバルイノベーションが開設されました。学校をあげて社会課題を解決するためのプロジェクトを推進する人材育成に取り組んでいます。

授業や課外活動から大きな学びを獲得し、しかも生徒・学生は自ら進んでプロジェクトに参加しています。彼らが目を輝かせて取り組む姿勢に希望を感じます。そこまで夢中になるプロジェクトの魅力とは一体何なのか。そして学院全体としてなぜプロジェクトが盛んなのか。聖学院の躍動するプロジェクトについて紐解いていきたいと思っています。





& Talk

特集
プロジェクトで、描くミライ。

多くの人がSDGsを自分ゴト化する
きっかけになりたい、
貧困問題解決や地域活性の手助けがしたい、
思うだけではなく行動へと飛躍する陰には
学校そして教員のサポートがありました。





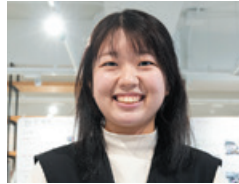
せがみ ともひろ
瀬上 倫弘

2012年国連WFP協会に入職。事業部マーケティング、管理部、事業部法人担当を経て、現在個人寄付と学校連携を担当。2017年にはアフリカのマラウイ共和国を訪問し、学校や病院、難民キャンプでのWFPの食料支援活動を視察した。認定ファンドレイザー®、社会貢献教育ファシリテーター。



あらい けんと
新井 乾斗

聖学院大学 政治経済学部3年。Petite Arche代表。高校入学時に渡仏。International Schoolに2年間在籍し、その後、聖学院高等学校に編入し卒業。2019年に聖学院大学に入学。大学では1年次からボランティア活動に参加し、3年次ではPetite Arche代表を務めている。



くりた みゆ
栗田 実夕

聖学院大学 政治経済学部2年。埼玉県立春日部東高校卒業後、2020年聖学院大学へ進学。大学1年次に2019年に実施された「学食寄付メニュープロジェクト」を知り、大学2年4月よりPetite Archeの活動に参加。



むねかわ まりか
宗川 麻莉香

聖学院大学 政治経済学部2年。高校時代は吹奏楽部に所属。聖学院大学入学時から聖学院全体でボランティア活動が活発なことを知り、その中でも、主体性を大切にすSDGsボランティア団体Petite Archeの活動に興味をもったことから、2年次よりPetite Archeの活動に参加。



しのはら ひよう
篠原 飛陽

聖学院高等学校1年生。(GIC: Global Innovation Class) 2021年5月にみつばちプロジェクトに参加。9月に合同会社And18'sの副社長に就任。12月にタイコヒー専門会社「明日、福」を起業。「起業が貧困問題解決の一助となるのか」という問いを持ちながら様々なことにチャレンジ中。

聖学院大学では2019年から「学食寄付メニュープロジェクト(以下寄付メニュー)」を推進しています。このプロジェクトは大学4号館の学生食堂で特定のメニューを注文すると、その売り上げの一部が国連WFP協会(以下WFP)を通じて飢餓に苦しむ人々への寄付になるというものです。初年度はテレビ埼玉に取り上げられ社会的に大きな反響がありました。一方、聖学院中高では2016年から校舎で養蜂を行う「みつばちプロジェクト」を展開しています。養蜂に加え、収穫したはちみつを商品化して販売しています。2020年には生徒と卒業生による会社として法人化しました。いずれも社会貢献に加え、思考力、判断力、表現力、協働性などを育てることもつながっています。

「寄付メニュー」の学生チームPetite Arche(以下プチ・アルシュ)の設立者・新井乾斗さん、そのメンバーの栗田実夕さん、宗川麻莉香さんと「みつばちプロジェクト」の篠原飛陽さん、そして「寄付メニュー」にも関わり、聖学院中高で授業をしたこともあるWFPの瀬上倫弘さんに、それぞれのプロジェクトとそこから見える聖学院の教育についてお話しいただきました。

「寄付メニュー」がつながるプロジェクトの輪

「寄付メニュー」はどのようなプロジェクトですか？

プロジェクトですか？

新井 「寄付メニュー」はプロジェクト考案のメニューを食べると、売り上げの一部が寄付につながるという企画です。またこの活動を通じて多くの人にSDGsやWFPのことを知ってもらい、一人ひとりのアクションにつなげたいという思いも込められています。元々の企画を考え、ロードマップを敷いてくださったのは先生方です。先生、4号館の学生食堂レバスタ(以下レバスタ)、寄付受け入れ先のWFP、そして先生に声をかけてもらった学生たちの4者でスタートしました。先生方が、社会貢献をしつつ学生の学びになることを目指していたので、運営は私たち学生に任せていただきました。私たちが行った主な活動はメニューの考案と広報活動、そして関係各所への協力依頼と連携でした。瀬上さんとお会いしたのもこのプロジェクトがきっかけでした。

瀬上 私はWFPの中のファンドレイジングという、皆さんから寄付や支援を集める仕事をしています。具体的には定期的に学校等に赴いて出張授業や講演、グループワークを行い、食糧支援の必要性や社会課題について理解・共感をしてもらう仕事です。その講演の一つに参加されていた聖学院大学の西海先生に声をかけていただき「寄付メニュー」に参加させていただくことになりました。

新井 企画としては寄付や社会課題の周知が目的ですが、レバスタの売り上げに必要でも持続可能という観点から必要です。そのため本当に売れるメニューを目指し、上智大学でヒアリングを兼ねて試食ツアーなども行いました。結果として給食約750食分の寄付ができ、テレビ埼玉が取材に来てくれました。瀬上さんと知り合えたことも含め、どんどん私たちの想定を超えたところまで発展していった、自分にもこんな大きなことができるんだとやりがいと自信を感じました。その時の感覚はとてよく覚えています。

瀬上 授業を聞いていただけではなかなか得られない経験だと思っています。他校で、ヴィーガンを使った学食寄付メニューを実施してみたいけど1人だけできないという相談を受けたことがあります。その学生に新井さんたちが進めているプロジェクトのことを話したら「頑張ってみます」と言っていました。新井さんの経験はこのプロジェクトを超えて勇気が必要な人をエンパワメントしています。これも連携や協働の一つだと思います。

新井 「寄付メニュー」のために定期的にだけ集まったメンバーでしたが、活動を続けるうちにメンバーが増えていきました。そこで、先生方の後押しもあり、学生主体の団体プチ・アルシュを立ち上げました。

「プチ・アルシュ」はどのような組織ですか？

国連WFP協会

国連WFP協会は、飢餓と貧困の撲滅を使命とするWFP国連世界食糧計画を支援する認定NPO法人で、日本におけるWFP国連世界食糧計画の公式支援窓口です。日本国内において世界の飢餓問題やWFP国連世界食糧計画の食料支援活動に関する情報発信を行い、多くの人々が容易に参加できる支援の方法と機会を広く提供し、日本社会からの物心両面の貢献が格段に高まることを団体の目的としています。
(出典：国連WFP協会ホームページ <https://ja.wfp.org/jawfp>)

「ShareTheMeal」

スマホから寄付ができる国連WFPの無料アプリです。約80円から寄付ができ、このアプリによって、今までお小遣いから寄付をするにはハードルが高かった中高生でも支援ができるようになりました。寄付を通して子どもたちが社会課題に目を向け、自分ごと化するきっかけとなるアプリです。



新井 プチ・アルシユは、SDGsを自分ごととして考えてもらうための団体です。そのきっかけとなる企画を学生目線で考えて実施しています。「自分の好きなこととSDGsを結びつける」ことをモットーに活動をしています。

宗川 私は大学1年生のゼミで学食寄付メニューのことを知り、2年生の時にプチ・アルシユに入りました。入学して1年間、新型コロナウイルスの影響で大学に来られなかったため、2年生になったら能動的に動きたいと思っていました。元々SDGsに興味があったこともあり、プチ・アルシユの主体的に企画して行動するところに魅力を感じています。

栗田 私も2年生から参加しています。高校生の時のボランティア経験がきっかけで、大学に入ったら自主的にボランティア活動をしてみたいと思っていました。加えてゴミの問題にも興味があったので、自分の興味・関心を活動につなげられるプチ・アルシユに入りました。実際、昨年11月にゴミ拾いのボランティアに参加することができました。

新井 他にも学内にグリーンカーテンを設置したり、エコプロ2021展に参加したり、古着の回収・再利用をする企画を立てたりと、様々なプロジェクトを推進しています。集めた古着はリメイクして、ファッションショーを開催することも企画しています。

高校生が社会課題に取り組み「みつばちプロジェクト」

「みつばちプロジェクト」はどのようなプロジェクトですか？

篠原 聖学院中高の校舎の屋上で養蜂を行い、そこで採取したはちみつを学内外で販売しています。またフードロス問題に着目し、見た目が悪いという理由で廃棄される予定だった果物からジャムを作っています。2020年1月に法人化(合同会社Ycom)し、北区を中心に販売事業を行っています。ただはちみつを作っているのではなく、貧困・地域活性化など様々な社会問題に真剣に取り組んでいることを知り参加を決めました。入ったら奥深さを知ってプロジェクト活動にどんだんめり込んでいきました。プロジェクトにおける私の役割は、養蜂活動から販売に至る全行程と高校1年生のまとめ役です。また委託販売先との連絡や納品、新規販売先等との商談などを行っています。

瀬上 篠原さんとは、12月に聖学院中高のワークショップの授業依頼を受けたのがきっかけで知り合いました。実は、そのワークショップの授業依頼をしてくれたのが篠原さん本人だったんです。高校生が直接依頼してくるなんて通常ありません。彼の行動力は本当にすごいと思います。

大学・学校間への広がり 大規模プロジェクトの可能性

それぞれのプロジェクトについての感想を教えてください。

新井 プチ・アルシユは地元の野菜を使ったベジプロスを推奨する企画で食品ロス、地産地消にも取り組んでいます。篠原さんと私たちには共通点が多いと感じています。ぜひ今度一緒にプロジェクトを動かしてみたいです。

篠原 私は、みつばちプロジェクトとは別に個人として「明日、福」というTwitter専門の会社を立ち上げています。生産者適正価格で仕入れた豆を使い、環境に配慮した素材を使うことで、貧困と環境の2つの社会課題に同時にアプローチすることを目指したプロジェクトです。このプロジェクトの根底には、特に意識せずルーティン化された行為をそのまま社会貢献につなげたいという思いがあります。食事もルーティンの一つであり、特定のメニューを食べると自動的に寄付につながる「寄付メニュー」は私の目指す完成形の一つです。ぜひプチ・アルシユの皆さんに詳しい話を聞きたいですし、私の商品も連携できたら嬉しいです。

新井 良いですね。今閉まっている大学1号館の1cafeのカフェ機能をプチ・アルシユが主体となって再開・再利用するアイデアもあります。学長にも承諾いただいたので実現に向けて動かそうと思っています。

篠原 その時はぜひ私も参加させてください。

瀬上 WFPの寄付も絡めたレッドカップカフェにしましょう。

ところで新井さん、古着を集めてリサイクルして古着のファッションショーをするプチ・アルシユのプロジェクト、実はこの企画、私が関係している様々な大学の団体が興味を示しています。さらにはこの話が呼び水になってレッドカップカフェのようなものも大学間で連携できる可能性が出てきています。もしこのプロジェクトが実現したら我々WFPとしても大学・学校間連携の一つの到達点になると期待しているのですが、この企画のその後の進捗はどうですか？

新井 私の方でも、連絡を取っている団体があったり、アルバイト先の服飾系の大学の学生が協力を申し出てくれたり、広がりが増えてきています。今年の11月か12月には実施したいと思っています。

瀬上 聖学院中高もコラボレーションできるかもしれませんね。

篠原 服飾系のプロジェクトで最近賞をもらった先輩がいます。

瀬上まさにこの企画にうってつけの人材ですね。

新井 本当にそうですね。ぜひ一緒にやっていきたいです。

瀬上 これが実現できれば前代未聞の大規模プロジェクトになりますね。

プロジェクトから見えてくる 聖学院の教育

—聖学院はどのような学校だと思いますか？

瀬上 聖学院は中高も大学もとても明るくて、とにかく主体的です。聖学院中高のワークショップの発表ではみんな5分10分と話していましたし、質疑応答でも次々と質問が出ました。ではなぜそんなに主体的なのか。教員との距離がとて近いかと思います。そしてそれは信頼関係に裏打ちされたものではないでしょうか。一方的に指導する側とされる側という関係ではなく、生徒、学生が自分のやりたいことを自分から言える関係があるように感じます。とはいえ放任するわけではなく教員がちゃんと支えている。学院を通じて教員のサポートがとて上手な学校だと思います。

新井 瀬上さんのおっしゃる通りだと思います。先生方のおかげで生徒・学生がより主体的になり、プロジェクトに向かってく、そういう環境があると思います。

宗川 確かに聖学院大学は先生方がとても気さくで、気軽に挨拶できる温かい学校だと思います。また学生同士でも意見ややりたいことが言いやすい、そういう雰囲気学校全体に流れていて、それがプロジェクトの活性化にもつながっているのかなと感じます。



「みつばちプロジェクト」の タイ・児童養護施設支援

同プロジェクトはクラウドファンディングでタイ・チェンライの「メーコックファーム」(児童養護施設)の支援を行いました。貧困に苦しむ地域の子どもたちを支援する取り組みです。寄付者へのリターン商品として、同プロジェクトが製造するのはみつばちのクラフトジンジャーエールやジャムが送られます。この支援の中心メンバーの1人が篠原さんです。



ベジプロスで食品ロス軽減、地産地消を目指す

プチ・アルシユは地元の野菜を使ったベジプロス動画を作り、食品ロス軽減と地産地消を促すことを上尾市に提案しました。ベジプロスとは栄養が豊富といわれながらも捨てられている野菜の皮やヘタを使ってつくる出汁のことです。この企画が採択され、51,000円の助成金を獲得しました。このプロジェクトが元でプチ・アルシユは大学内で野菜を作ることになり、その野菜が「寄付メニュー」にも食材として使われました。

栗田 私も先生との距離の近さを感じます。他大学の学生にも聖学院の特徴として言われたことがあります。加えて学院全体としてSDGsに触れる機会が多いと思います。授業だけではなく、校舎内の至る所がSDGsの話や考え方で溢れている印象です。だからこそ社会課題に取り組むプロジェクトが盛んになるのだと思います。

徒と一緒に行動しています。生徒が今、興味があることを先生に話すと、すぐプロジェクト化する話や、学校内ですでに始動しているプロジェクトの紹介をしてくれます。自分もそういう経緯で「みつばちプロジェクト」に入りました。参加した先では先輩方が真剣に取り組んでいる姿を目の当たりにします。だから自分も本腰を入れて取り組んでみようと思うようになりました。この一連の流れができあがっているのが大きいと思います。

瀬上 私が学生の頃は知識偏重でした。暗記して筆記でアウトプットすることが求められていました。しかし今は、ベースとなる知識は必要ですが、その知識をどういかして、どう考えて、どう行動するかが問われています。聖学院はそれが実現できている最たる学校ではないでしょうか。

(取材日/2022年2月)

ボランティア団体「いろとりどり」

オンラインの親子イベントで
子どもと保護者をつながる



2021年7月に行われたオンラインバスツアー。この日、大学に来ていた一部のメンバーは教室に集まって運営を行いました。

2020年、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、聖学院大学の学生は様々な対面でのボランティア活動を自粛せざるを得ませんでした。活動したいのに活動できないという状況が続く中、学生によるオンライン主体の団体がいくつか立ち上がりました。『いろとりどり』もその一つです。『いろとりどり』は、乳幼児とその保護者との交流を通じて地域のつながりを創り出している団体です。乳幼児の子育てを支援している学外の団体と連携し、家から参加できる親子イベントを企画、開催しています。例えば観光地や美術館を巡るオンラインバスツアーがあります。観光地の場合は風景を表示しつつ、その場所にちなんだクイズを出したり、美術館の場合はメンバーが考えた絵描き歌を子どもたちと一緒に描いたりします。他にも保護者の膝の上に子どもが乗ってバスの歌に合わせて体を動かす体操や手遊びなどが盛り込まれています。参加した子どもはメンバーの声かけに答えてくれたり保護者と一緒に体を動かしたり、オンラインでも楽しんでいる様子が伝わってきました。

コロナ禍によって親族や地域など外部とのつながりが得られず孤立している保護者がいます。また核家族化が進む現在において、コロナ禍がなかったとしても保護者は周囲に理解者がいないという孤立感に苛まれます。さらにイベントに参加した

くても、そもそも子どもが幼いと外出自体のハードルが高くなります。オンラインでの親子イベントはただ単なる代替ではなく、これらを解決する可能性を秘めています。

『いろとりどり』の活動について、立ち上げから参加されている加藤桃子さんは「子育てが大変なのは間違いありません。ただ子どもの成長や笑顔など幸福な面があるのも確かなことだと思います。だから孤立感に苛まれている人がいたら助けてあげたい。辛い思いだけをさせたくないと思っています。」と言います。加藤さんはイベント中、子どもがぐずって困っている保護者がいると「気にしなくて大丈夫ですよ」と伝えたくて「○○くん眠いのかな？」と子どもに声かけをするそうです。

社会全体が『いろとりどり』と同じ目線で親子を見守ったら、安心して子育てできる社会が実現するかもしれません。



メンバーの加藤桃子さん

クリスマスパーティーも開催

クリスマスの時期にはオンラインでクリスマスパーティーも開催しました。クリスマスに関する手遊びで子どもと一緒に過ごし、協力団体を通じて各家庭にプレゼントも送りました。プレゼントはメンバー手作りのティッシュケースです。



聖学院 防災エコプロジェクト

災害シミュレーション体験イベントで自分たちに何ができるかを考える



「任せろ!救い隊」の進行をする黒沼さん(左)と企画案のプレゼンをする北村さん(右)

聖学院教育デザイン開発センターSDGs・ESD教育デザインユニット(※)の1stステージとして『聖学院防災エコプロジェクト』が計画され、聖学院中高、女子聖学院中高の生徒から約100名の有志メンバーが集まりました。プロジェクトは9月下旬にキックオフし、実施内容決定のためのプレゼンテーションを経て、12月23日(木)には生徒たちが企画したプログラムを実施するイベント『防災エコキャンプ』が開催されました。

高校2年生の黒沼七音くろぬまななねさんは、「協働で何かをつくり上げていくこと」に強い関心を持っています。特にプロジェクトの「誰一人取り残さない」というコンセプトに共感して参加しました。中学時代の演劇の経験を活かして企画・実施したのは、救助・看護のシーンをシミュレーションし、エチュード(アドリブ劇)で再現する「任せろ!救い隊」というプログラム。次回(3月)の防災エコキャンプは聖学院小学校の児童も参加しますが、中学生が小学生に教えるということではなくて、小学生に自分たちで考えて欲しいという思いから、アウトプット中心のプログラムにしたのだそうです。プロジェクトが楽しいのはアイデアが受け入れられるから。生徒の意欲を優先し、チャレンジする活動を応援してくれる聖学院の環境は恵まれていると感じていると感想を語ってくれました。

高校1年生の北村知慈きたむらちかさんは、困っ

ている人を減らしたいという気持ちで常に持つていて、パラスポーツ応援プロジェクトにも参加していました。防災は重要だと思いつつも何もできていないと感じていたため、防災エコプロジェクトへの参加は良い機会だったと言います。今回のプロジェクトで一番大切にされたことは「工夫」。防災時の避難所生活は大きなストレスがあることが想像できますが、工夫によってそれを軽減したいと考えました。そして、備蓄食品の乾パンを、工夫によって美味しく、楽しく食べる「防災食・エコクッキング」のプログラムを実施しました。北村さんの活動の動機づけは「おもしろい」と思うこと。「おもしろい」という感情が科学や学問を発展させると思うので、その感覚を大切にしていきたいと話してくれました。

※聖学院中高、女子聖学院中高、聖学院小学校が連携して聖学院の強みを高めようとする組織。
—SDGs・ESD教育デザインユニットの他、英語・グローバル教育デザインユニット、ICT活用教育デザインユニットがある。

防災エコキャンプ

「情報収集・防災マップ」「災害脱出」「救助・看護」「防災食・エコクッキング」「避難所生活・防災エコグッズ」の5つをテーマに、生徒たちが企画した体験型のプログラムを実施するイベント。プロジェクトメンバーは、参加者がE(経験)A(気づき)T(知識、技術)を得られることを意識して企画づくりを行っています。



写真は北村さんのチームがプログラムでつくったキャンディ乾パン。

お手伝いしたい隊 リーダーシップ研修

「引っ張る」「先頭に立つ」だけでない
一人ひとり、自分らしいリーダーシップを知る



立教大学経営学部准教授館野泰一先生からアドバイスをもらいながらプロジェクト課題を考えました。

女子聖学院中高の「お手伝いしたい隊」は学校説明会で来場者の校内見学ツアーを担当するなど、受験生向けのイベント運営の協力をしてくれる生徒の団体です。自ら志願をした中2から高2の生徒がメンバーとなり、多い年では70〜80名が登録されています。女子聖学院では、生徒会や部活動はもちろん、運動会や記念祭、合唱コンクールなど、生徒が主体となる行事がほとんどです。そして、そうした活動では生徒たちがリーダーシップを発揮することが期待されています。もちろんお手伝いしたい隊にもリーダーシップが必要であり、お手伝いしたい隊メンバーのための学びの機会として、リーダーシップ教育が専門の、立教大学経営学部准教授 館野泰一先生と立教大学の大学生サポートメンバーを招いて1月25日(火)にワークショップを実施しました。

ワークショップにはお手伝いしたい隊のメンバーから、希望者12名の生徒が参加。いくつかのチームに分かれて、架空のシチュエーションにおけるチーム課題の解決をみんなで考えるワークを通して、画一的でない個々の強みをいかしたリーダーシップのあり方を学びました。

ワークショップに参加したAさんは、「誰か一人が周りをまとめて引っ張っていくことがリーダーシップだと思っていたが、メンバー一人ひとりがリーダーシップを発揮し、いろいろな

お手伝いしたい隊

「学校説明会」「夏の女子聖体験日」「入試応援カウントダウン」等の協力をする有志生徒の団体。メンバー全員が「学校の良さを伝える」という一つの目標に向かって活動をしています。多くの生徒が部活動や委員会など女子聖学院中高の他の活動に参加しているので伝えたい内容は豊富にあります。受験生の時に、お手伝いしたい隊の先輩に出会って憧れた経験から自分も参加するという好循環が生まれています。



視点から物事を考えて目標に向かうことが大切なのだということを学んだ」と言います。

Bさんは「プロジェクトに携わる人誰もが、自分にどのような強みやリーダーシップがあるのかを理解して、それを惜しむことなく発揮できることが理想的だと思う」と言います。

このワークショップで学んだことは、これから先の学校での活動や、卒業後の進学先や社会に出てからもきっと役に立つことでしょう。

また、今回の学びを通して、お手伝いしたい隊の活動にはどのようなリーダーシップが期待されていると思えますかという質問に、Aさんは「コミュニケーション力」と「洞察力」、Bさんは「広い視野」と「積極的な行動」と答えてくれました。

チャイルドサポーター制度

支援とは一方的な関係ではなく、
絆をもつということ



小学校2階、靴箱の前には「チャイルドサポーター」のコーナーがあります。離れた場所にいる「もう一人の友だち」の写真が、毎年貼り重ねられていき、児童は自分と共に成長していることを実感できます。

聖学院小学校の児童は、自分の誕生日に「誕生日献金」を献げています。自分の誕生を祝ってもらうだけではなく自らも生まれたことに感謝して献金をしています。その献金は日本国際飢餓対策機構のチャイルドサポーター制度に寄付されています。

チャイルドサポーター制度は、寄付を募って、飢餓や貧困で教育環境が整わない子どもたちに基礎的な教育や就業支援などを行って、地域社会のリーダーとして成長できるようにする取り組みです。寄付には、特定の子どもへの里親的な支援と、活動全体を支えるための支援の2種類があります。聖学院小学校の「誕生日献金」は特定の子どもを支えるために使われています。また、学校全体でまとめて寄付するのでなく、「この学年の『もう一人の友だち』を支える」というスタンスで、学年ごとに同じ年の子どもをサポートしています。児童と「もう一人の友だち」が一緒に成長しますし、手紙と写真も送られてくるので、児童は実在する友だちとして意識しやすくなります。「もう一人の友だち」や、その子を取り巻く環境に対する児童の関心も高まります。

この取り組みは、この制度を知っていた相浦智先生が提案し、2016年の4月から実施されました。その最初の年、4年生の「もう一人の友だち」が Deng 熱で亡くなるという悲しいことが起こりました。日本だったら助かった病気で、教員たちは話し合いの結果、事実から逃

げないという姿勢を貫くことに決め、児童にこのことを告げました。児童の中には涙する子もいたそうです。「心がえぐられるような出来事でした。しかしこのことを通して支援とは一方的な関係ではなく、絆を持つということだと知りました」。相浦先生は、今でも大切に保管しているその子の写真を見ながら話してくれました。

チャイルドサポーター制度は支援先の子どもが18歳になるまで続きます。そのことも考慮して「誕生日献金」から寄付していることで、児童の卒業後も寄付が途切れることはありません。聖学院フェア等で小学校を訪れた卒業生が、支援先の子どものその後の写真を見て寄付していくこともあるそうです。児童と「もう一人の友だち」の間には、しっかりと絆ができています。



相浦智先生

収穫感謝の礼拝で聞く現地の様子

収穫感謝の礼拝では、毎年、日本国際飢餓対策機構の職員の方を招いて世界の子どもたちの現状を話していただきます。飢餓や貧困に見舞われている現地を実際に見てきた方々の言葉なので、児童もよりリアリティをもって受け止めます。また聖学院フェアでは同機構宛の募金が行われており、その寄付金がこの日、職員の方に手渡されます。



聖学院フェアでの募金の様子。この寄付は活動全体を支えるための支援として使われます。(2018年度撮影)

歩む人たち

「卒業生を尋ねて」

8

聖学院大学こども心理学科卒業
なかしま
中島 結女さん

●PROFILE

2019年3月こども心理学科卒業。1年生の時から、福島県いわき市の仮設住宅での「遊び広場」のボランティア、大学での留学生交流会、「子ども食堂」などさまざまなボランティア活動に参加。現在、埼玉県内の発達支援センターで児童指導員として幼児の療育に携わる。



いわき市でのボランティア活動では、子どもたちと歴史探訪の旅も経験しました。

授業、課外活動を問わず 大学での学びが今の自分につながっています

発達支援センターで児童指導員をされているこども心理学科卒業生の中島結女さん。療育という形で発達障害の子どもたちを支援しています。療育は定型発達の子ともとは違うペースで育っている子どもに対し、その子に合わせた小さなステップを積み重ねていき、発達を促す支援です。

中島さんは大学の4年間、福島県いわき市の「遊び広場」のボランティア活動に参加し続けました。「遊び広場」は仮設住宅に住む被災した子どもたちの心を、遊びを通してケアしていく活動です。学生は心理士の教員に同行し、子どもたちと遊ぶ役割を担います。もともと子どもが好きで、心理士を目指していた中島さんにとっても、この取り組みは学びが多い経験でした。「自分が本気で楽しむことで子どもたちも徐々に心を開いていくのがわかりました」という中島さん。時には子どもたちが急に不機嫌になったり、ちょっとした言葉で傷付いたり、抱え

ている心の闇の深さに気づき戸惑うこともありました。また遊ぶよりただ寄り添っているの方が子どもにとって必要な時もありました。まだそれがわかっていなくて失敗したこともあるそうです。「子どもと向き合う時は、言葉に現れない非言語の部分も見逃せないということを感じました」と言います。

今の職場では4、5歳の子どもの小集団のグループ療育を受け持っています。まだうまく言葉で伝えられない子どもも多く、課外活動で学んだ非言語の部分にも注目する力は今の仕事につながっています。児童指導員の仕事について「自分のアクションが正しければ子どもも良いアクションを返してくれるし、間違っていれば間違ったアクションが返ってきます。勉強にもなるし、うまく行ったらときは明確な手応えがあってやりがいがあります」と中島さん。大学で学んだことをいかしつつ、今も心理士を目指して頑張っています。



中島さんの職場、発達支援センターにて。様々な遊びを展開し、子どもの発達を促しています。

2014春
子どもと関わる心理士に興味があり
聖学院大学
入学

2014冬
いわき市のボランティア活動
「遊び広場」に参加

2019
聖学院大学
卒業

現在
発達支援センターにて
児童指導員として活躍



支える 人たち

聖学院を外から支えてくださっている人たちに
聖学院への想いを伺ってみました。

No.
03

株式会社レバスト

たかやま えり

高山映里 さん

父がシェフをしていたこともあり、小さい頃から家族と一緒に料理をしていた。料理が好きで、高校生の時に調理師免許を取得。学校の給食室で10年勤務した後、2021年6月に株式会社レバストに転職。聖学院大学の厨房で調理をしている。

食べる人のことを思い、
日々のメニューを考えています。

食を通して学生・教職員の健康を支え、大学での学びの一端を担っているのが学生食堂です。聖学院大学の4号館1階には株式会社レバスト(以下レバスト)が運営する学生食堂があります。レバストは、2019年から始めた「学食寄付メニュープロジェクト」(以下寄付メニュー)に参加、学生の主体的な活動と社会貢献に協力しています。そして昨年の同プロジェクトのメニューを実現したのが高山映里さんです。高山さんに学生食堂における業務と、「寄付メニュー」について伺いました。

「私たちの主な業務は、調理とメニューの管理・運営です。食事を作ることに加え、食材の発注やメニュー開発なども行っています。調理に関しては、多い時は1日に100食ほど作ります。発注においては、少しでも安く美味しい食事を提供できるよう費用と質に気を使っています。」

『寄付メニュー』では豆腐ドーナツ、アップルパイ、スープなどを作りました。メニュー自体は、学生が自らアンケートをとってきちんと成果が出るように計画し、提案してくれたもので

す。一番難しかったのは、寄付代が出るように材料費を抑えつつクオリティを保つことでした。また、朝の仕込みも増えたので、その点も大変でした。それでも、いつもと違うメニューを提供でき、さらに社会貢献もできるということは私たちにとてもやりがいがありました。『寄付メニュー』のリピーターになる学生もいて、利用者にも喜んでもらえるのかなと思います。また、この企画を通して、学生が甘いものを望んでいることがわかったので、可能なら通常メニューにも甘いものを加えられたら良いと思っています。」

レバストでは食べる人が飽きないよう定期的にメニューを入れ替えています。実はただ単にローテーションしているのではなく、少しずつ改良を続けているそうです。食べる人のことを思い、レバストの皆さんは見えないところで努力をされています。高山さんは「美味しい」という言葉が聞けると嬉しいと言います。厨房は常に忙しそうで、なんとなく気後れしますが、利用した際には少し勇気を出して感謝を口にしてみましょう。愛情のスパイスが増量されるかもしれません。

まだまだあります!

Seig NEWS

学生も生徒も教員も職員も
次のステップへと
日々新しい試みをしています。

聖学院大学



「子どもは誰のもの～子どものケアを考える～」 金谷京子先生 心理福祉学研究講演会

2月2日(水)、「子どもは誰のもの～子どものケアを考える～」と題し、人間福祉学部・心理福祉学部において長年に渡る教育と研究、そしてボランティア活動をリードして下さった金谷京子先生による心理福祉学研究講演会を開催いたしました。震災当初、取り残されがちな子どもたちのケアに着目し、子ども遊び広場を作った金谷先生。子どものケアには「愛をもって、子どもの手を放して目を離さない」ことが大切なこと、さらに保護者支援や障害児支援の研究や実践から「援助要求が気軽に出来る社会づくり」の大切さを語られました。講演終了後、感謝を込めて教員一同より花束が贈呈されました。



聖学院大学 出版会



新刊紹介

『ヨーロッパ文化と日本文化： 人間の自己理解から学ぶ』

金子晴勇著『ヨーロッパ文化と日本文化：人間の自己理解から学ぶ』（新書）が昨年12月に刊行されました。著者の研究方法である人間学的なアプローチは、人間の自己理解から多彩な文化的営みを解釈する試みとなっています。本書では愛や霊性の理解、死生観、人間の自律・自由などに焦点が当てられています。ギリシア的理性とキリスト教的な霊性との総合として結実してきたヨーロッパ文化と日本文化の特質を、対比的に明らかにする読みやすい講演集となっています。



聖学院大学



「優秀レポート」として採択 学生ボランティア活動体験レポート募集事業で 在学生在が受賞

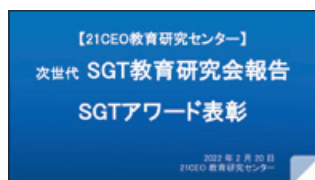
聖学院大学児童学科3年の金久保仁さんが、一般財団法人学生サポートセンターが実施する『令和3年度学生ボランティア活動体験レポート募集事業』において「優秀レポート」に採択されました。金久保さんはボランティアアソシエーション・GRACEに所属し、学内のいくつかの活動に意欲的に取り組んでいます。最近ではコロナ禍における新しいボランティアの可能性を模索し、活動の継承を願っています。『私とボランティア』と題した本レポートでは、これまでの活動を通じての学びや経験、またボランティアの魅力や意義を問いかける内容がまとめられています。





英語科 伊藤大輔先生が 21世紀型教育機構SGTアワード優秀賞を受賞

2月20日(日) 聖学院中高が加盟する21世紀型教育機構にてSGT(スーパーグローバルティーチャー)アワードが行われ、伊藤大輔先生(英語科)が、2021年度SGTアワード優秀賞を受賞しました。受賞の理由として、21世紀型機構におけるア krediteーション(外部評価)における授業評価が高かったこと、授業動画等によって生徒の成長を促せていたことが挙げられています。また同機構SGT教育研究会にて実践発表を行い、加盟校への貢献が高かったことも評価されました。SGTアワードの受賞者は最優秀賞1名、優秀賞5名の6名で、伊藤先生はそのうちの一人として受賞しました。



生徒のより良い学びのために 教員も熱心に学んでいます

聖学院中高の教員は「ICEモデル」「PBLのデザイン」「ICTのスキルセット(G-suite)」「ICTのスキルセット(i-Works)」「ルーブリック評価」の5つのテーマの中から、自分が関心のあるチームに参加して研修を行ってきました。2月19日(土)はそのまとめとなる研修会。前半1時間は5つのテーマごとに各チームで集まり、チームのリーダーの先生を中心にして1年間の振り返りを行いました。そして後半の1時間は担当する学年ごとに集まり、自分が参加したチームで学んだことの学年での共有がなされました。



自分のことばとして伝える力を育む、 女子聖学院伝統のレシテーションコンテスト

2月16日(水)、チャペルにて中学レシテーションコンテストが実施されました。女子聖学院のレシテーションコンテストは継続的に行われている伝統的な行事の一つです。中学2、3年生は全員参加で事前に予選を実施し、当日は8名の各学年の代表が選ばれて英語暗唱を披露。単に英語の暗唱を競うだけではなく、文章の内容を理解し、独自の表現を加え、自分のことばとして伝える力が評価の対象となります。外部の外国人講師を審査員に加えて審査が行われて、優秀者3名が決定しました。レシテーションで磨き上げた英語力がこれからの学びにいかされることに期待しています。



聖学院小学校



PTAニューイヤープレゼントはジャズ！

1月19日（水）、PTAのお父さまお母さま方からすてきなジャズ演奏が子どもたちにプレゼントされました。朝9時過ぎ、小学校のチャペルに「JOY SWING COMPANY」のにぎやかな演奏が響き渡りました。子どもたちは初めて聴くジャズの生演奏にびっくりしていましたが、テレビCMの曲やディズニーメドレー、そして「聖学院小学校の歌」のジャズバージョンなどが流れると、手拍子などで、リズムを取りながら体全体で聴いていました。アドリブ（即興演奏）の実演や楽器の特徴についての興味深いお話もあり、あっという間の45分でした。



聖学院みどり幼稚園



音楽会

2月25日（金）、ヴァイオリン奏者で卒園生でもある伊藤万桜さんをお招きし、プレイルームで音楽会を行いました。プログラム前半は園児と保護者が一緒に聴き、後半は保護者の方々のみで聴きましたが、皆ヴァイオリンの美しい音色に聴き入っていました。園児たちは演奏に合わせて、演奏者になりきって体を動かしながら音楽を楽しみました。本物の音楽に触れることによって、心も体も動かされるような体験は、子どもたちの将来をきっと豊かなものへと育てゆくことでしょう。園児たちも保護者の方々も、心から楽しむことができた音楽会でした。



聖学院幼稚園



3学期の幼稚園

1月11日（火）から始まった3学期。お正月遊び・季節の製作・行事を楽しんで過ごしました。感染症対策を徹底し、子どもたちにも伝えて頑張ってもらいながら楽しく遊べるようにしています。1月の恒例行事のお餅つきは今年も残念ながらできませんでしたが、その代わりに平塚亭のできたてみたらし団子を美味しくいただいて、みんなで力をつけました。2月の節分は鬼も豆を投げる子どもも、ソーシャルディスタンス。「鬼は外！」声は小さめに、おこりんぼ鬼や泣き虫鬼など悪い鬼を追い出しました。「福は内！」これからの一年も良いことがいっぱいあるように豆まきを楽しみました。



皆さまにお寄せいただいたご意見を紹介します！

読者の声



本誌では毎号、P.01目次下にて
読者の皆さまにアンケートをお願いしております。
そのアンケートにお答えいただいたご意見の中から
反響が大きかったものを、編集の上、いくつか紹介させていただきます。
アンケートにご協力くださった皆さま、
貴重なご意見を誠にありがとうございました。

【特集：キリスト教教育が示すもの】

チャプレンの方々の
信念が伝わってきて
良かったです。

聖学院の成り立ち、
聖書を大切にしてい
る理由が良くわかっ
て、法人に対する理
解が深まりました。

「神様から無条件に
愛されていると知る
ことで自己肯定感が
高まる」という話が
興味深かったです。

座談会は登場さ
れる方の想いのよ
うなものが伝わっ
てきて好きです。

ミッション系の学校
に通っていたので、キ
リスト教教育という
テーマ自体がとても
興味深かったです。

ラインホールド・
ニーバーの祈りが
心に響きました。

【支える人たち】

聖学院の警備をされてい
る方は、どなたも感じが
良く、訪れるたびに安心
します。そんな警備員さ
んの素顔を知ることが
できて嬉しかったです。

卒業生の保護者で
す。今でも覚えてい
る警備員さんなので
楽しく読めました。

学校教育は、様々な
人によって支えられ
ているということが
よくわかりました。

お世話になっているの
に注目されることが少
ない方たちなので、こう
して取り上げられるこ
と自体が好ましいと思
いました。

皆さまの声を届けました / 「支える人」に アンコールインタビュー！



もうすぐ20年!!
この期間が積み重なり、培ってきたものが
自然と身につき、今の行動が素直にできる
ようになった今日このごろです。

●女子聖学院中高の守衛
佐藤 政美 さん

聖学院ニュースレターアンケート

QRコードからあなたの声をきかせてください。アンケートに回答いただいた方の中から抽選で10名様に「聖学院オリジナルキーホルダー」をプレゼント！いただいたご意見は、編集の上本誌にてご紹介させていただくことがあります。

- 有効回答期間
2022年3月17日～2022年5月31日
- 当選発表
当選者の発表は、賞品の発送をもって
代えさせていただきます。



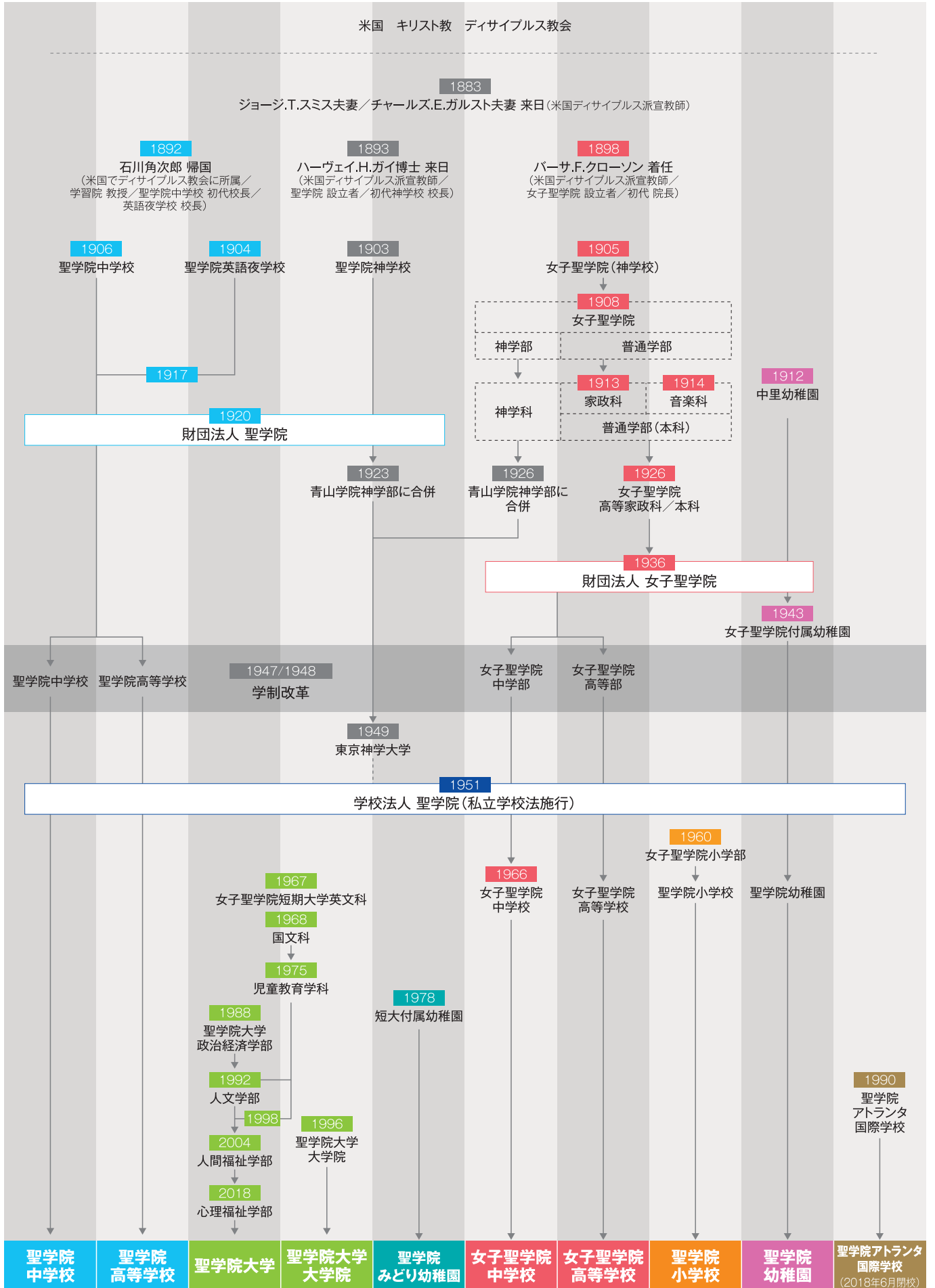
本アンケートに関するお問い合わせ >>
聖学院広報センター Tel 03-3917-8530

編集後記

今年度最後の学院広報誌をお届けします。今号では各校の様々な生徒・学生主導のプロジェクトを中心に挙げており、最大の見どころとなっております。今号で初めて編集の取りまとめを任せられ、ほぼ手探りで誌面作りに取り組んでまいりました。オンライン取材ではネットワークが不調になったり、写真を撮りすぎて掲載写真の選定に悩んだりと度々つまづきつつも、おかげさまで何とか完成にこぎつけました。作成に当たりご協力いただいた皆さまには、この場を借りて改めてお礼を申し上げます。今後も皆さまに楽しんでいただけるよう精進していく所存です。これからも法人広報誌をよろしくお願いたします。(N.K)

聖学院の歴史

History of Seigakuin University & Schools



EPISODE #16

聖学院歴史探訪

#16 聖学院教育 の歴史

- ディサイプルス教会 上 -



聖学院はアメリカのディサイプルス教会の日本宣教によって創設されました。ディサイプルス教会は正式名称をChristian Church (Disciples of Christ) と言いますが、日本では「基督教会」か「ディサイプルス」と呼ぶのがならわしとなっています。

この教会は十九世紀初頭、アメリカで長老派教会から分かれた二つのグループが合同して出来ました。一つは、パートン・W・ストーンが中心となって出来たクリスチャン・チャーチで、これは、ストーンが長老教会の伝統的信仰の一つであった「予定説」に反して「万人救済説」を説教したことが問題となって、結局長老教会から離脱して「スプリングフィールド長老会」を作ったことに源をもつ教会です。

もう一つは、トーマス・キャンベル、アレキサンダー・キャンベル親子が中心となって出来たワシントン・クリスチャン教会です。こちらは、トーマス・キャンベルがアメリカ奥地へ伝道旅行に出かけた際に、数年間も聖餐式にあずかる機会に恵まれなかった別の派の長老教会の信者たちを聖餐式に招いたことが問題となって、やはり分かれて出来たグループです。

(次号に続く)

出典：聖学院キリスト教センター編『聖学院の精神と歴史』聖学院ゼネラル・サービス、2006年版(出典より一部変更)

学校法人 聖学院

理事長／清水 正之 院長／山口 博
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2 Tel 03-3917-8351
ホームページ <https://www.seig.ac.jp/> E-mail pr_h@seigakuin-univ.ac.jp

■さいたま上尾キャンパス

聖学院大学

・政治経済学部／政治経済学科
・人文学部／欧米文化学科 日本文化学科 児童学科
・心理福祉学部／心理福祉学科
学長／清水 正之 創立／1988年 〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1 Tel 048-781-0925

聖学院大学大学院

政治政策学研究科／文化総合学研究科／心理福祉学研究科
創立／1996年 〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1 Tel 048-780-1801

聖学院みどり幼稚園

園長／赤田 直樹 創立／1978年
〒331-0045 埼玉県さいたま市西区内野本郷820 Tel 048-622-3864

■駒込キャンパス

聖学院 中学校 高等学校

校長／伊藤 大輔 創立／1906年
〒114-8502 東京都北区中里3-12-1 Tel 03-3917-1121

女子聖学院 中学校 高等学校

校長／山口 博 創立／1905年
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2 Tel 03-3917-2277

聖学院小学校

校長／佐藤 慎 創立／1960年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-1 Tel 03-3917-1555

聖学院幼稚園

園長／田村 一秋 創立／1912年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-2 Tel 03-3917-2725

●インターネットでの寄付のお申し込みについて

クレジットカード (VISA、MasterCard) をお持ちの方は、お申し込みから入金までご自宅等で、PC、スマートフォン、携帯電話からインターネットによるお手続きができます。下記URL、QRコードにアクセス下さい。

<https://www.seig.ac.jp/asf/>



住所変更・広報誌の発送停止・お問い合わせ

<https://www.seig.ac.jp/asf/contact/>

学校法人聖学院ASF事務局

Tel 03-3917-8530 (月～金 9:00～17:30)

